
冬休みにあった それだけの話

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬休みにあった それだけの話

【著者名】

Z3677B

【作者名】

滾

【あらすじ】

冬休みにあった話。それ以上でもそれ以下でも無い、っていうそれだけのお話。

一日目 祖父の入院

祖父が入院した。

祖父、というのは母方の祖父の事で、父方の祖父は僕が中学生の時に亡くなっている。

基本祖父は病氣をするような人ではなかつたために、僕等は少し心配していたのだが、祖母の話を聞く限りさほど大変な事では無いらしい。

なので僕等は祖父の家に泊まりがてらのお見舞い、墓、お見舞いがてらのお泊りに行くことにした。

ついでにお年玉も貰つてしまおうといつ魂胆である。

しかし、祖父の家は敷地こそ広いものの相当古い。というかぼろい。未だにトイレ、というか便所は外にあるし、お風呂も外にあつてしまもその電灯が点かない。

畑があつて、そこで野菜を作つたりしている。そんな家で、祖父と祖母は叔父と一緒に暮らしているのである。

祖父の家について、新年の挨拶をしてから早速祖父の入院している病院に向かう。

祖父の入院している病院はそれほど大きくなく、三箇日さんかじといつ事もあつて患者さんはほぼ居なかつた。

二階にあるという祖父の部屋に、道順を覚えるよつとして母と祖母と妹と僕で向かう。

途中で見かける患者さんは恐らくほぼ入院患者さんで、更にその殆どがお年を召した方ばかりだつた。まあ、中には小さい子も数人見受けられたけれど。

そんなこんなで、祖母について歩いていりつちに祖父のネームプレートが出ている大部屋を見つけた。

シャッターで区切られている祖父のスペースに、シャッターを無造

作に開けて入つていく。

久しぶりに見た祖父はそれほど狼狽しているようでもなく、僕は少し安心した。

何だ、来たのか。とぶつからぼうに言つたつもりだろうが、祖父の顔は綻んでいた。

祖父が入院した理由は熱病で、今の所熱は引いているが何故熱が出ているのかという原因が解らないらしかった。まあ、それでも元氣がないわけではなく、会話も全然できるようだつた。

僕は妹に、「久しぶりの親子水入らずをさせいやう」と言ひ、一人でそつと席を外した。

と、言つても特にする事もないため、僕と妹は連れ合つて病院内をふらついた。

さつきた廊下を、逆回しで歩いていく。

院内は暖氣があまり聞いてなく、建物の中なのに息が白かつた。

「ん？」

回り角を曲がつて少しのところに、一人の女の姿が見えた。小学校高学年か、それとももう中学校に入っているのか。それくらいの歳の頃の少女。

壁に手をついて、苦しそうにしている。

大丈夫だろうか・・・。

そんな事を思つていると、

「あ」

その子が急に吐いた。

そのまま蹲つて、苦しそうにしている。
わ、どうしよ・・・。

何て思つている内に、突然僕の隣から妹がその子に向かつて駆け寄つていつた。

その子の体を支えるようにして、背中をさすつている。

僕も遅れて駆け寄つて、なにが出来るでもなく「大丈夫?」と言つ。

と、

「看護婦さん！」と妹が僕を見上げて叫んだ。
つれて来い、という意味だらうといふ事はすぐに解った。

「あ、おうー」

僕は頷くと、近くのナースステーションに居た看護婦さんを急いで連れてきた。

「大丈夫！？」と看護婦さんがその子を抱き起しして、病室まで連れて行く。

僕と妹は半ば取り残される形で役目を終えた。そのまま、しばらくそこでぼう、つとしていた。

何か、僕は情けなかつた。

帰り際、妹がポツリと、

「あの子、血も吐いてた」

と言つた。

「そうか・・・」

僕は呟いた。別に、なにが出来るでも無いし。

でも、と、吐く白い息を見て思つ。

あの子は、こんなお正月を何回もひで過ごしてきたのだろうか・・・

。と。

僕は「そうか・・・」ともう一回呟いて、妹と一緒に母達が待つ病室へと戻つていった。

一四四 祖父の入院（後書き）

遅ればせながら、新年明けましておめでとうございます。
今年も去年より増して頑張っていきたいと思いますので、よろしく
お願いいたします。

祖父の家で一昔前の暮らしを満喫して、一田田の朝を迎えた。起きてから昼ごろまでお正月の特番を見、そして再び祖父が入院する病院に向かった。

昨日と同じ道を通り、病院に向かう。

病院は昨日と同じように人は少なく、駐車場には車がほとんど無かつた。

すれ違う人の居ない廊下を、昨日よりも幾分か早いスピードで歩く。祖父の部屋にはやはり昨日より早くつくことが出来た。

祖父は昨日よりも元気そうで少し安心した。が、依然として熱の原因は解つていらないらしい。

それはまだ不安の種のままだが、それでも笑顔で話をする祖父はやはりうれしそうで、それを見て僕はお見舞いに来て良かつたと思えのだった。

暫く話をしていると、祖父がふとオレンジジュースが飲みたいと言つた。

それじゃあ、と、僕が席を立つ。下の売店で買つてくるのが一番早い。

じゃあ私も、と、妹も一緒に席を立つ。結局、昨日と同じ形で僕と妹は病院内を一人で歩くことになった。

昨日と同じように、来た廊下を逆回しに辿る。

昨日と違い、今日はお年寄りとすらすれ違わない。大部屋の扉は開いてるから中が見える。そこから患者さんが見える程度だ。まあ、だから何つていうわけじゃないけど。

曲がり角を曲がって、昨日僕と妹が女の子を助けた場所に来た。

今日はさすがにあの子の姿は無く、一瞬妹と顔を見合わせたものの普通にその場を通り過ぎた。

が、

通り過ぎて数歩のところ。

「ん？」

僕は背中にしつかれるような感触を感じ、振り返った。

「あの」と声をかけて来たのは、確か僕が昨日ここに呼んだ看護婦さんだ。

「はい？」

僕と妹は立ち止まって、看護婦さんの話を聞いた。

聞くに、昨日のあの子とそのご両親が昨日の事に關してお礼を言いたいと言っているとの事。

一瞬考えたが、別に断る理由はどこにもないため、僕と妹は頷いて、病室まで看護婦さんに案内してもらった。

今来た道を少し戻つて、その病室に着く。何回か前を素通りしていだ場所だった。

どうやら祖父の居るような大部屋ではなく、一人だけが入る個室の病室らしい。

ナンバープレートが一人分しかない。

扉が閉まっているため、看護婦さんが扉をノックして、

「田中（仮）さん」

と、名前を呼ぶ。田中、と言つのがあの子の苗字らしい。

「はい」

と中から返事が聞こえて、ガラガラ、と同時に扉が開く。中から、あの子のお母さんだと思われる女性が出てきた。

女性は僕と妹を見て一瞬怪訝そうな顔をされたが、何かに気付いたのか「ああ！」と顔を明るくした。

「昨日の件の・・・」

と看護婦さんが説明をしてくれる。それを、「はいはい」と、頷きながら女性は聞いていた。

「それでは」

看護婦さんはひとしきり説明を追えると行ってしまった。と、女性が頭を下げて、「ありがとうございました」と。

「あ、いえいえ」といつちも頭を下げて言つ。

「ま、早苗（仮）もこっちに来て御礼を言ひなさい

女性は言つて、部屋の中を振り返つた。

僕と妹も、一緒に部屋の中に視線をやる。

ベッドの上で半身を起しているあの子が、いつちを見ていた。

「あ、いいですよ別に。寝てもらつてて」

僕は首を振つたが、そう言つてゐる間にもうあの子はベッドを降りてこつちに来てしまつていた。

お母さんの隣に並び、僕と妹にペこつと頭を下げて、

「ありがとうございました」と言つた。

小さくか細い、それでも精一杯搾り出したような声だった。

「いえ、大丈夫そうで」

「本当に、ありがとうございました」

お母さんはまた頭を下げる。

「いえいえ。あ、もう戻つていただきて・・・」

早苗ちゃんはそんなに体調が思わしく無いらしい。パツと見の判断だからそうとは限らないけど、まあ、病人にそんな長いこと話をさせるのは酷だ。

「そうですか?」と、お母さんは早苗ちゃんを見、「じゃあ、早苗、ベッドに戻つて」と言つた。

同時に、お母さんが一歩を歩んで、扉を閉める。何だらう?

首をかしげてると、ふたたびお母さんが頭を下げた。

下げて、「ありがとうございました」。

次いで、「あの～・・・」と、何か言つていたような声で言つ。

「お家はここいら辺にあるんでしょうか・・・?」と。

お家、と言つのは、僕等の家のことだらう。

しかし残念ながら、僕の家と祖父の家は相当離れている。お正月でもないと来ることが出来ない理由はそこにもあった。

その旨を伝えると、「そうなんですか・・・」と、何故かお母さん

の表情が暗くなつた。

「あ、でも今日と明日はここにいるんですけどね」

僕の補足に、お母さんの表情が今度は僅かに明るくなつた。

「祖父が入院しているので、そのお見舞いに帰つてきたんです」

「そうなんですか」

あ、別に今の補足は必要なかつたか。

ともあれ、とつとつ戻らないと母さん達が心配するか、と僕は時計を見た。

と、お母さんが突然口を開く。

「あの・・・、今日と明日だけでもいいので、娘の話相手になつてもらえないでしょうか?」と。

「え、はい?」

多分素つ頓狂な声を出してしまつたのだろう。妹の視線が痛い。

「え? どういう・・・?」

「娘は長い間入院してまして、今ではもう友達すらお見舞いに来てくれなくて・・・。いつも一人で寂しそうにしているんです・・・」

「はあ・・・」

「今日と明日の一日だけでいいんです。一日だけ、あの子の話し相手になつてもらえませんか?」

お母さんは、そう言つてまた頭を下げた。

どうする? という意味を込めて、妹を見る。

妹も一瞬迷つたようだつたが僕も別に異存は無く、

「はい、僕等でよければ」と一人して頷いた。

そんな綺麗な返事を出来ていたか定かではないが、そんなような事を言つた。

かくして、僕と妹は一日間の友達を得たのだった。

決して広くない室内。

ベッドが合つて、椅子が一脚。テレビに点滴があつて、人が五人も

六人も入つたらもう窮屈な、そんな室内。

けど、一人で居るには確かに広い、そんな中途半端な広さの病室だつた。

早苗ちゃんは、ずっとこんなところに居るのだと呟つ。

三年前からずっと病院に入院しているらしく、小学校の卒業式も出ることが出来ず、中学校にも一回も言って無いらしい。因みに、一年生だと呟つていた。

最初お母さんに紹介された時は僕等も早苗ちゃんもささいなかつたが、今は楽しそうに話をしている。

とは言つても、僕が会話に混ざることが出来たのは五分程度の事で、後は早苗ちゃんと妹だけで話をしている。

女同士では話が弾むのだろう。僕が間に入る隙間がどこにもない。それにしても、と僕は備え付け（？）の窓から外を見る。

別段何が見えるわけでもなく、ただ車が通る大通りが見えるだけ。こんな所にいれば、体調も悪くなるといつものだつ。

母と祖母は事情を説明すると快く理解をしてくれた。今は近くのデパートで買い物をしている。多分戻つてくるのに一時間は掛かるだろ。

その一時間は、早苗ちゃんと話を出来る。まあ、僕は窓の外を眺めているだけだけど。

だけど楽しい一時間は、

ブルルルル・・・

すぐに終わるもの。

『もしもし? もう帰るから、挨拶して出てきなさい。駐車場で待つてるからね』

と、母から僕の携帯電話に電話があつた。

それを妹と早苗ちゃんに伝える。

と、一瞬早苗ちゃんが悲しそうな顔をした。それを、僕は見てしまつた。

それでも次の瞬間には笑顔を作つて、「そつか」と早苗ちゃんは言

つた。

「また明日も来るね」と、妹は病室の前で手を振った。

早苗ちゃんもベッドの上で手を振り替えした。笑顔だった。

駐車場に向かう途中、妹が、

「楽しそうで良かった」と言った。

僕は「そうだな」と言って頷いた。

妹はさつきの早苗ちゃんの表情には気付いていなかったようだ。まだ子どもだ。そう思う。

でも今は、子どもでいい。

そんな事を考えながら、僕は、僕と妹は駐車場に向かった。

延々ノリツツ「三」をかまし続けると、つい初夢から田を覚まし、僕は祖父の家での三田三の朝を迎えた。

と言つてももう一時に近く、おはよづ、といつ挨拶が適当なのか迷う時間帯だった。

「いつまで寝てるの」と母に叱咤されつつ、朝飯兼昼飯を食べる。自分の家で食べるような軽い昼食ではなく、ちゃんと祖母が作ってくれた手作りの昼食だった。

そんな暖かい昼食を堪能して、しばらく外を散歩する。ちょっと歩くくらいなら迷うことはないだろう。

外に出ると外気が肌を刺し、風がびゅう、と唸つた。それでも、構わず歩く。

歩きながら、年に数回しか見ない景色を見て回る。

前に来たときと、隣の家の外観が少し変わっていた。それから母の通つていた幼稚園に新しい遊具が増えていた。やはり、間を開けて来ると何かがいつも違つてている。今この時も、時間は経つているのだと実感させられる。

そんな事を考えて、ふと、早苗ちゃんの事を思い出した。

あの子は、いつから病院にいるんだろう。これから、外の景色を見ていないのである。

自分の家の周りがどうなっているのかすら、あの子には確かめる術は無い。

せいぜい、両親から聞いて知る程度のものだろう。

自分の目で違いを知ることが出来ない。

ずっとあの病室から見える景色だけを見て、歩きたい所も歩けず、平凡で楽しくは無いであろう生活を強いられている。

ああ・・・と僕は空を見た。特に意味は無い。気分だ。黄昏れてみたかつただけ。

空は真っ青に晴れ渡り、雲がふよふよと浮いている。

帰ろう。

と、思った。帰ろう。

帰つて、とつとと病院について早苗ちゃんの話し相手をしてあげよう。

それがいい。と思った。

僕は踵を返すと、少し足早に家に戻つていった。

病院に着いた。今日から病院の営業が再開するらしい、患者さんがかなり多く居た。

駐車場も殆ど埋まつていて、車を停めるのが困難な程だった。

病院内をもはや慣れた足取りで歩いていく。やはり、昨日や一昨日とは違い、すれ違う人の人数は多かつた。

一旦祖父の方へ行つて、顔を出す。

祖父はやはり元気で、何で入院しているのか解らないくらいだった。僕等が来ているから強がつている、という可能性も無いわけじゃないが。

ともかく、僕は祖父とそこの話をして、母に断つて病室を出た。妹も勿論ついてきた。

そして一人して、早苗ちゃんの病室に向かつたのだった。

「あ、今日も来ててくれたんだ」と、早苗ちゃんは僕等の顔を見て言った。

病室の中には「両親の姿はない。未だ来ていないのか、それとももう来て帰つてしまつたかのどちらかだろう。

昨日と同じように、妹が早苗ちゃんのベッドに腰を掛けて、僕は備え付けの椅子に座る。

椅子に座ると、椅子はギシ・・・、と音を立てた。

「晴れてるね」と、最初に口を開いたのは僕だ。

この部屋からも見える空は、やはり晴れていた。

「晴れていますね」

妹と一緒に、早苗ちゃんは空を覗上げた。

残念ながら、この後僕は昨日と同じように殆ど会話をに入る事は無かつた。

ただ、早苗ちゃんに“空が青い”といつ事を伝えられた事は良かつたと思つ。

まあ、別に、早苗ちゃんだって今日の空が青い事くらい気付いていただろ？ナビ。

数十分話をして、母からメールを貰つて部屋を出た。

帰り際、やはり悲しそうな顔を一瞬見せて、早苗ちゃんはそれでも手を振つて笑顔で僕等を見送つてくれた。

「ああ・・・、そういえば・・・」

と、僕は車に戻る間際呟いた。

「何？」

と、妹が首をかしげる。

「俺等、今日帰るつて早苗ちゃんに言つておいたつけ？」

「あ・・・、どうだろ？・・・。お母さんが言つてくれてたんじゃないかな？」

「そうか・・・」

そうだといいな。と思つ。

そうだといいな。と。

見上げた空は、やはりどこまでも澄み切つていた。
ずっとこのまま晴れていれば。

そんな事を考へて、僕等は車に戻つていった。

二四三 帰る（後書き）

最終話じゃないです。まだあと一話ありますので、お付き合いくだ
れい。

四日目の朝だ。

僕はまだ祖父の家に居る。

本当は昨日帰るはずだったのだが、昨日帰り際に車の中で母が「もう一泊していこうか」と言ったので、急遽そういう事になった。しかし、今日は病院に少し寄つて挨拶だけして帰るだけ、という条件つきだった。

それでも、と僕と妹は頷いた。それでもいい。と。

さて、と、僕は布団から這い出て外を見た。外は昨日の晴れ空とは打つて変わって、黒い雲が空を覆つて、強い雨が降りしきつていた。

「行こうか」と、部屋の扉の向こうから母が言った。

「行こう」と、母には見えないだろうに、僕は頷いて言った。

外は、太陽の光が無いためにいつもより一層寒かつた。

そんな外気に身を震わせながら、帰り仕度を済ませて乗り込む。

今日は祖母はついてこない。もう僕等は病院に行つた足で家に帰るからだ。

「また来やあよ」

祖母が傘をさして、手を振つて言った。

「また来るよ」と、僕等も車の中から手を振つた。

祖母は、見えなくなるまで手を振り続けていた。

病院に行く道中、雨脚が更にひどくなつた。

とてもじゃないが、防水性のコートでも着ていらない限り外には出れないほどだ。

傘さえあれば良いのだが、残念なことに、車の中に傘は置いてなかつた。祖母の家の傘は、祖母が見送り際に持つっていたあの傘一本だけだつた。

「どうしようつ・・・」

と、妹が助手席に座つて呟いた。

別に返答を求めるよりではなかつたため、僕は何も言わずに外を見ていた。

雨が少しでも止んで、妹が早苗ちゃんに挨拶ができれば良い。そんな事を考えながら。

予想外だつた。

雨もそうだが、車が駐車場に停められない、という状況だつたのだ。車が一杯で、母が運転する車が停められない。いよいよ挨拶することが困難になつてきていた。

「お兄ちゃん」

と、不意に妹が助手席から僕を呼んだ。

「何だ?」

僕は外から視線を妹に移動させる。

妹はこつちを振り返ることなく、前を向いたまま言つた。

「行つてきて」と。

「は?」

「コート着てるのお兄ちゃんだけじゃん。私着てないから、こんな雨の中行つたら塗れちゃうし」

「・・・・・」

「早く。後ろ、車来てるから」

「解つたよ」

僕はフードをかぶつて、雨の降りしきる外に出た。

病院まで小走りで駆けながら、妹が最後まで後ろを振り返らなかつた事を思い出す。

アイツも行きたかったらう。が、この雨ははつきり言つて「行きたいなら行けばいい」とかいう事じや片付けられないくらい激しい。ちゃんと挨拶しないとな。

病院に走りこんで、そう思つた。

昨日よりも多い患者さんを避けながら、フードを外して病院内を少

し早足で歩く。

別に急ぐ必要な無いのだけど、何故か足が勝手に進んだ。もう慣れた足取りで、早苗ちゃんの病室に急ぐ。

これが、多分見納めになるだろう。もう来ることは無い。次に来た時に、多分僕は早苗ちゃんの事は覚えていないだろう。そういうものだ。ふとしたきっかけで思い出すことはあっても、お見舞いに来るかといわれればそれは無いだろう。だから、せめて最後に挨拶はしておきたかった。

次の曲がり角を曲がつたら、病室が見える。

曲がつて、病室の前に来た。

「・・・・・？」

ふと、僕は気付いてしまった。

早苗ちゃんのナンバープレートが、扉の横についていなかった。

ドクン

嫌な予感がする。

僕は「ンンン、と閉まっている扉をノックした。

「・・・・・」

返事は無い。

もう一回、ノックをしてみる。

「・・・・・」

やはり、返事は無い。

恐る恐る、僕は扉の取っ手に手をかけた。

その手は、確かに震えていた。

ガラガラガラ

開いた扉。開けた視界。

その視界の中に、早苗ちゃんの姿は無かつた。

何も無い、無機質な部屋。

昨日あつた早苗ちゃんの私物も、何も残つていない。
何故だろ？・・・。

僕は考えた。

考えたくは無かつた。と、いうより、答えは解つていたんだと思つ。
が、認めたくなかった。
まだ、確証はない。

僕は扉を閉めて、ナースステーションに向かつた。
早苗ちゃんがどうしたのか、聞きたかつた。
できれば、あの日僕が呼んだ人が良かつたが、居なかつた。
だから、他の人に聞いた。

「号室の田中さん、つて・・・」

どうなつたんですか？

すると、看護婦さんは少し苦い顔をして、教えてくれた。
そうですか。と、僕は答えて帰つていつた。
ああ、どうだろ？「そうですか」なんて言えていただろ？
解らない。覚えていないから。

変える途中、祖父の部屋に顔を出した。

帰るという事を伝えると、祖父は少し悲しそうな顔した。

「じゃあね」と、僕は笑つた。と思う。

笑えていただろ？か。解らない。覚えていないから。

車は向かいの建物の駐車場に停めたとメールが来た。
僕は外に出て、歩いて車まで向かつた。
しこたま、雨に打たれた。
それでも良かつた。寧ろ、そのほうが良かつた。
理由は、・・・わかるだろ？
妹が、早苗ちゃんの事を聞いてきた。

「ああ、元気だつたよ」と、ぬれた髪を拭きながら、僕は言つた。

元気だったよ。

「そつか」と、妹は笑った。

やっぱり、お前は子どもだ。と、思った。

だから、それでいい。

子どものままでいい。

僕の今の表情を、読み取れなくて良い。

多分、僕は祖母の家に帰るたびに思い出す事になるんだろうと思いつつ。
お見舞いには、やっぱり行けない。行く事は出来ない。

それでも、きっと。

僕は、彼女の事を、思い出の中にしまったまま、忘れる事はないん
だろうなあ。

そんな事を思つて、僕は外を見た。

雨は、やはり強く地面を打ちつけているばかりだった。

四四三 摻（後書き）

最終話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3677b/>

冬休みにあった それだけの話

2010年12月18日17時38分発行